

## 第111回 山口西田読書会 (前回110回4月30日のプロトコル)

参加者：唐露、谷、桑原、岡田、高木、佐野

1. 前回の討論の柱の考察を行った。

## 2. 論点

- (1) 討論の柱「西田は『善の研究』第3篇で純粹経験の立場を逸脱しているのではないか」について、前回高木氏より、論拠4)で意志(内)は法則(外)の支配を受けない、とあるのは主(内)と客(外)を分けて対立させているから、逸脱しているとの意見があった。これに対し山口氏は純粹経験自体は主客の対立がないが、すでに判断に出ているために対立があると主張した。そこで問題になるのは「純粹経験の立場」とは何かということである。
- (2) 「純粹経験」の初出である『心理学講義』(旧岩波版全集第16巻99~101頁)が参照された。そこで西田は「物心の関係に対する種々の説明」として「唯物論的解釈」「精神論的解釈」「二元論的解釈」「平行論的解釈」の四種の説明を挙げ、これ等を「いずれも独断的仮定より推論せる者」としている。そうして「今凡ての独断的仮定をすて、吾人が直接に知り得る経験的事実に本づきて思索すれば、前にも云った様に物体现象と精神現象とは独立せる実体でもなく、また一哲学的本体の両面でもなくて、吾人の純粹経験の事実を異なる視点より観察したる者にすぎない」とされる。「吾人が直接に知り得る経験的事実」が「吾人の純粹経験の事実」である。したがって「純粹経験の立場」とは「凡ての独断的仮定をすて」「純粹経験の事実」に本づきて思索する立場、ということになる。この立場は『善の研究』でもぶれることなく踏襲されていることが確認された。そこで問題となるのは「純粹経験の事実」に本づきて思索するとはどういうことか、ということである。
- (3) それが「純粹経験を唯一の実在として全てを説明」(『善の研究』「序」)する、ということである。すなわち「純粹経験を「有る」として、そこからすべてを説明する立場である。これは既に判断である。純粹経験自体は判断以前であり、「ただ我々がこれを自得すべきものであって、これを反省し言語に表わしうべきもの」ではない(Ⅱ-4-1)。したがって「純粹経験の立場」とは言語に表わすことのできないものを言語に表わす立場のことである。ついで純粹経験からいかにして精神現象(内)と物体现象(外)が成立するかが第2編に即して明らかにされた。
- (4) まず「純粹経験」が「有る」(実在)とされる(Ⅱ-1-2~3)。実在の「統一的方面」が主観であり、「統一せらるる方面」が客観である。そうして「精神現象、物体现象の区別というのも決して二種の実在があるのではない。精神現象というのは統一的方面すなわち主観から見たので、物体现象とは統一せらるるものすなわち客観の方から見たのである。唯同一実在を相反せる両方面より見たのにすぎない」とされる。(Ⅱ-7-3)
- (5) 自然(物体现象)にも「統一的自己」があり、それが無機物、動植物、精神と段階を追って明らかになるが、この「統一的自己」(目的)による説明と機械的説明(原因)による説明は相犯す筈のものではない、とされる。(Ⅱ-8-4~5)
- (6) そうして真実在が主観客観の分離しないものであるから、この「統一的自己」は実に「我々の意識の統一作用」そのものであるとされる。(Ⅱ-8-6)
- (7) 逆に精神も主観的個人的空想を没して客観的となれば自然の統一的自己と一致する、とされる。ここで「精神現象と物体现象を内外に分ける考えは、精神が肉体の中にあるという独断より起こるので、直接経験より見ればすべて同一の意識現象であって、内外の区別があるのではない。我々が単に内面的なる主観的精神と言っているものは極めて表面的なる微弱なる精神である、すなわち個人的空想である。これに反して大なる深き精神は宇宙の真理に合したる宇宙の活動そのものである(Ⅱ-9-6)」という記述に着目した。ここで内外の区別は主客の別ではなく、深淺の別になっていることが確認された。つまり内外の別には主客の左右の別と深淺の上下の別がある。

- (8) かくして「自然を深く理解せば、その根柢において精神的統一を認めねばならず、また完全なる真の精神とは自然と合一した精神でなければならぬ、すなわち宇宙にはただ一つの実在のみ存在する」のであり、この〈自然の統一力＝精神の統一力〉が宇宙の根本としての神であることが確認された(Ⅱ-10-1)。以上は第2編にもとづく整理である。第3編では精神現象と物体现象の関係はどうなっているであろうか。
- (9) まず行為が内(意志)と外(動作)に分けられている。そうして「行為の要部」は「この内面的意識現象たる意志にある」とされている(Ⅲ-1-1~2)。この内外の別は主客(左右)の別である。しかし「何らかの障碍のために動作が起らなかったとしても、立派に意志があつたのであればこれを行為といふことができ」る、という表現から「意志があつた」ということを外から眺める場合、これを動作と考えているのではないか、との意見が提出された。
- (10) 第2章では意志の本を物質性に求め、物質は単に機械力をのみ具するとする科学者の見地を扱っている。これは意志を外から眺める立場である。西田はこの科学者の考え方を逆転させて、物質の中にすでに自然の合目的力が働いており、合目的なる自然が階段を踏んで(機械的運動、生物の生活現象、動物の意識現象、意志)のおのが真意を發揮するという説を展開しているが、これは上で確認した西田の自然観に他ならない。(Ⅲ-2-3~4)
- (11) その上で「意志は我々の意識の最も深き統一力であつて、また実在統一力の最も深遠なる発現である」とある。「実在統一力」とは自然の統一力(統一的自己)のことであろうとされた。ついで「外面より見て単に機械的運動であり、生活現象の過程であるものが、その内面の真意義においては意志であるのである」における内外が問題となった。この内外は左右(主客)か、それとも上下(深淺)か。読書会ではこれは上下(深淺)の別であろう、ということになった。
- (12) 同段落の末尾に「もとより現象を内外に分ち精神現象と物体现象とが全く異なる現象とみなすときは、右の如き説は空想に止まるように思われるかもしれぬが、直接経験における具体的事実には内外の区別なく、かくの如き考えがかえって直接の事実である」とあるが、この「内外」はどうか、また第6段落末尾に行為について「外より動作と見らるるものが内より見て意志であるのである」の「内外」はどうか、が問題となった。こちらは左右(主客)の別であろう、ということになった。そうして「外より」見る立場が第4章「価値的研究」における「理論的研究」、「内より」見る立場が「実践的研究(価値的研究)」であることが改めて確認された。前者は「存在の法則」すなわち「原因もしくは理由」を考究し、後者は「価値の法則」すなわち「目的」ないし「欲望または要求」を考究する。
- (13) 第3章第6段落で西田が自らの自由論を展開している箇所に「我々が或る理由より働いたときすなわち自己の内面的性質より働いたとき、かえって自由であると感ぜられるのである。つまり動機の原因が自己の最深なる内面的性質より出でた時、最も自由と感ずるのである」とあるが、この「内」は如何。前者の「理由より働くときすなわち自己の内面的性質より働いたとき」における「内面的」とは「外の束縛を受けない、おのれ自らにて働く」ということであろう。この内外は「目的」と「原因」が衝突しない場合であろうから、さしあたり左右(主客)の別であると考えられる。この自由は選択的意志の自由を含意し得るが、西田は選択的意志の自由を真の自由とは考えない(Ⅳ-3-7)。そこで西田は後半で「つまり動機の原因が自己の最深なる内面的性質より出でた時」とすかさず追加する。この「最深なる内面的性質」が「精神活動の法則」に他ならない。ここで問題になっているのは上下の別、すなわち深淺の別である。
- (14) 以上の考察によって第3章末尾の、意志(内)は法則(外)の支配は受けない、という主張が必ずしも純粹経験の立場を逸脱したものではないかもしれない、とされた。

残された課題：そのことの意味がまだ十分に確認されていない。何故逸脱していないといえるのか。二種類の内外の区別の意味するものは何か。我々は何故差別の世界に出なければならないのか、という岡部氏の問いはどうなるのか、また西田の考えるソクラテスは本当に自由なのか。